

都市図・都市地図・都市記号

—— マップムンディと初期ローマ図を中心に ——

高 橋 正

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

(1998年10月5日 受理)

はじめに

地図とは何かという問に答えることは案外に難しい。地図とは、日本国際地図学会編『地図学用語辞典』（増補改訂版，1998）によると「地表の形状を一定の約束に従って一定の面上に図形等で表示した画像で，これを基礎に，その上と下との空間を表示するものを含むとすれば，地球にかかわるすべての図面を総称することができる」とし，一定の約束としては地図図式（地図投影・記号・縮尺等を含む）があり，一定の面としては面の形状（平面・曲面）と材質（紙・金属・その他）の区別があると説明している。

従って，地球にかかわるすべての図面の総括という点において既にその多様性を認めているとともに，地図図式もまた様々な約束の存在の可能性を否定するものではない。その多様性・不確定性について都市の図的表現，特に1500年以前作成のローマ図を中心に若干の考察を試みることにする。

I. 地図と絵画

地図は文字通り「図」であることを必要条件としているが，それが十分条件でないことはいうまでもない。それが図的表現 (graphic representation) の一様式にすぎないことは「図」の前に置かれた「地」という文字の存在によってあきらかである。

「地図」という語は古代中国に始まるが，当初は文脈その他から地図を意味することが自明な場合は，「図」の一字を用いることが多かった¹⁾。因みに「版図」という場合の「図」は戸籍をあらわす「版」と対の文字として地図を意味している。

ここでは「地」というまでもなく「土地」にかかわるものであることを示し，現代欧米語の地図を意味する言葉の語源であるギリシャ語やラテン語が描かれた素材を示す言葉，カルテス（パピルス紙片）やマップ（布地）に由来しているのに比べ，地図の本質を示すより優れた表現であるといえよう。

現在では地図の「地」は土地を意味するというよりも，前述の定義のように「地表」あるいは「地球」のそれであると解する方が自然であることは「海図」をもまた「地図」と称していることからあきらかである。また更に月や火星等他の天体に関しても用いられ

ていることは地球の地図からのアナロジーによるものであろう。

図であることが、地図の十分条件でないことを示すもうひとつの理由として、地図以外にも土地の図の存在することをあげることができる。例えば風景画がそれで、これを一般に風景図と叫ぶのは、「画」と「図」を意識的あるいは無意識的に区別していることによるものと思われる。この場合「画」は「絵」と同様、美的・主観的表現であるのに対し、「図」は科学的・客観的表現を示すのに相応しいとされているのではないだろうか（もっとも用器画といった用例もあるが）。風景画より、より写実的表現によるものを江戸時代には真景と称したが、これは地図と絵画の中間的な存在といえよう。

Harvey, P.D.A. は絵地図と測量地図を一本の線の両端に対峙させているが²⁾、絵地図のさらに外延長上に風景画または風景絵画が位置していると考えられる。

測量地図に比して、風景そのものを主たる対象とした絵画の成立は、東西両洋とも比較的遅い時代のこととされているが、風景を描くことは古くからあってさほど新しいことではない。ただ風景画が絵画のジャンルのひとつとして成立したのが遅かったということであらう。

地図と風景画の違いは、前者がその対象を主体の外に置こうとするのに対し、後者はそれを主体の内に取り込んでしまう点にある。後者においてはしばしば対象の空間的位相が無視されて心理的イメージとして表現されるのに対し、前者にあっては省略や総描 (generalization) はなされても対象の空間的な位相は重視される。このことからして専ら主体の心理描写であるメンタルマップもまた前者に属するものといえよう。

しかし、現実の描写においてこの両者は峻別されている訳ではなく、絵地図の多くの例が示しているように、理念型としての地図と理念型としての絵画の間に位置づけられ、両者の中間的な性格をもつ図的表現であることが普通であり、地図と絵画を一線で画することは難しい。

空間の客観的表現としての地図、主観的表現としての絵画が共に目に見えない何か、例えばある種の理念や規範を表現するものであれば、それは即ち象徴 (symbol) としての作用を有する。例えば一枚のエルサレムの地図が、ある人にとってはシオニズムの象徴であったり、一枚の子供を描いた絵が家族愛の象徴であったりすることがある。この場合、これらの地図や絵は客観的科学的描写や美的描写に止まるものではなく、理念的規範的表現 (図像) として、つまりシンボルとしての機能をもつ図的表現として類別されるべきであらう。いうまでもないがこの機能に作図者によって付与されるばかりでなく、読図者が作図者と関係なく一方的に付与することも稀ではない。

この両例の場合は、共にシンボルの形態と含意との間に強い関連性を有しているが、形態上の類似性を全くもつことのない象徴表現もあり得る。筆者はかつて図的表現の三角図表 (trilinear chart) を提示し³⁾、その底辺の両端に地図と絵画を、また頂点に目に見えないものを可視的に表現する象徴を位置づけたが、これらの三点は一種の理念型であり、す

すべての図的表現が象徴たり得ることからいえば、頂点に位置する象徴は、形態と意味との間に全く関連性のない conventional sign であるともいえる。このことは Peirce, Ch, S. のいう記号の三分法のうちの象徴記号と呼ぶものに相当している⁴⁾。この頂点から幾分、絵画の点に寄った辺上に iconic sign (類似記号)、地図の頂に寄った辺上に indexical sign (指示記号) が位置していると考えられる。前者は対象物と形態的類似性を有する記号であり、後者は対象物の空間的位置関係を示す記号 (e.g. 方格・経緯線・等高線・水準点・方位記号等) である⁵⁾。

以上のように考えると、地図記号の総称としてシンボルという言葉を用いていることは甚だ不都合なことに思われる。文章が文字というサインによって構成されているように地図もまたこれらのサインによって構成される。

地図を構成するサイン (記号) を研究する地図記号論 (筆者のいう狭義の cartology) は大きく、記号形態と記号内容の関係を研究する意味論 (semantics)、記号と記号の関係を研究する統辞論 (syntactics)、記号とその使用者 (作図者ばかりでなく読図者も) との関係を研究する実用論 (pragmatics) に大別されるが⁶⁾、本稿ではこの三分野の区別を念頭に置きながらも、敢えて分野を限定することなく、まず中世ヨーロッパの地図に示された都市記号について若干の予察的な検討を試みる。

II. 地図と記号

前章において地図が記号によって構成されると述べたが、すべての地図が記号だけで描かれている訳ではない。例えばパリを描く地図のなかで Gomboust 図 (1652 A.D.) にあっては主要な建造物を絵によって表わしている⁷⁾。つまり、この地図では市街の表現において主要建造物の表示にのみ絵画的描法が用いられ、他はいわゆる幾何平面図 (測地平面図 plan géométrique) として記号化して描かれている。

ここでいうところの絵画的表現とは何か、記号化とは何かということであるが、敢えていうならば記号化とは類別化であり、記号は「類」を示すものであるといえよう。これに対して絵画的表現とは「個」を示すものである。即ち Gomboust 図におけるパリの市庁舎 (Hôtel de ville) の図像は、他のいかなるパリの建造物をも図示し得ないし、他の都市の市庁舎を示すのにも用いられない。

しかし、もしパリ市庁舎のこの図像が、市庁舎一般を表現するのに用いられるとすれば、それは市庁舎という「類」を表現する記号となる。その場合これが conventional sign であるか iconic sign であるかといえればパリ以外の市庁舎と何ら形態的な類似性をもたないことから前者であるとされねばならない。たまたまパリの市庁舎と同じ様式の市庁舎があったとしても例外ではない。

「都市図」と「都市地図」はしばしば混用されて来たが厳密には区別すべきであろう。即ち、都市図は都市の絵画的表現を、都市地図は都市の測量地図的表現を示すものである

が、両者の間は連続的であって一線で画することのできない点は筆者がしばしば主張して来たところである。

ここでいうところの「都市図」にしても「都市地図」にしても通常「個」としての都市を表現するものであるのに対して、都市記号は複数の都市を表現するのに用いられる、これには都市を他の事象と区別するために用いられる場合と、複数の都市をさらに幾種類かに類別する場合（即ち都市記号間での類別化）がある。またさらに後者の場合、分類の指標によって様々な類別化が可能である（都市そのものに関しては「類型化」「分類」という言葉が用いられる）。

中世ヨーロッパの地図のなかで都市記号の類別化に関して最も興味深い事例を提供してくれるのが、有名なポィティンゲル図（Tabula Peutingeriana）である。ウィーン国立図書館に現存するこの図は旧蔵者 Konrad Peutinger（1465—1547）の名によってこのように呼ばれているが、現存の MS は12世紀から13世紀初頭のもので、失われた原本は4世紀に、さらにはその稿本の成立の資料は1世紀にまで遡る可能性のあるものとされている。

その形状は元来幅34cm 長さ6.82cm の獣皮紙（本来12枚最西部の1枚欠如）を合わせた巻物状であったと思われる、画面には西は大西洋から東はアジアの東端まで、つまり当時知られていた世界全体を描いているが、陸地や海の図形は狭長な画面の形に制約されて極めて歪となり、従って各地点の位置の関係は正しく示されていない。即ち列車の時刻表所載の



図1 Tabula Peutingeriana（部分）

日本地図のごとき図形となっており、これと同様の交通路の記載を主とする地図であった。

この図においては交通路とともに当然のことながら多くの集落が示されているが、そのうち最も多くの集落（その総てが都市といえるかどうかは問題）は単に線状記号として赤線で示された道路の屈曲点として示されているにすぎない（屈曲点と屈曲点の間には距離が記されている場合もある）。

その他の記号により示された555地点のうち429地点は左右に同形の塔をもつ建物のファッサードで示されているが、単に両塔を並立させただけの記号もある。Dilke, O.E.W. はこれらを Villa を描こうとしたものとしているが⁹⁾、道路の屈曲によって示した集落より重要性が高いと作図者が考えた集落の conventional sign と解するのが自然であろう。

次に49の神殿あるいはバシリカ風の建物として示された地点は付記された地名からしても明らかなように宗教的な機能を有する集落であり、中央に水面を描く52の方形の建物も地名からして湯治場を示す記号である。他にも数列の長屋を合せたような屋根をもつ方形の建物は穀物集積地を示す記号であるとされている。また、Bosphorus や Alexandria（エジプトの）の燈台、Ostia（ローマの）や Fossis Marianis に示された港湾、Crypta Neaplitana（ナポリ付近のトンネル）、祭壇などの記号的表現があり、神殿以下は形態上の類似性を有する iconic sign と考えられる。

これらの記号は集落を類別化した結果として表現されており、各々の類に属するものの間では多くの場合、互換し得る。ただし港湾を示す2つの記号には両者の間に若干の違いがあり、互換が可能か否かは判断し難い。この両者は共に円弧状に弯曲した半円状の湾を囲む建物で示されているがローマの Ostia（Portus Augusti）にあっては湾内に二つの堤防状の突出部や燈台を描き、もうひとつの港湾に比してより重要な港湾であることを思わせしめ、いわゆる personalification としての性格を帯びている。

personalification とは一般には擬人化、人格化を意味するが地図記号としては個性化あるいは特性化を意味し、他との不換性を特徴とする記号で、特性記号とでも称すべきものである。

Peutinger 図にあっては、典型的な personalification の例を、Roma, Constantinopolis, Antiochia という三大都市の記号として見ることができる。これによってこの図の作者がこれらの都市を世界で最も重要な都市と考えていたことを知ることができる。この図の作成年代を論ずることは本稿の主たる目的ではないが、これらの三都市を最重要として示していることは、その年代を4世紀とする重要な手掛かりとなっている¹⁰⁾。即ち、Constantinus 帝没後、ローマ帝国が彼の三人の子、Constantinus II 世・Constantius II 世・Constans I 世により三分された状況を示すものとされている。もしこの推測が正しければその年代は Constantinus I 世の死（337 A.D.）と Constantinus II 世の Aquileia での敗死（340 A.D.）の間となる（Constans の死は350 A.D. で以後 Constantius II 世の覇権が確立する）。あるいは Constantinopolis の Procopius, Roma の Valentinianus I 世, Antiochia の Valens

の鼎立する365—366 A.D. の状況を示すものとの考えもあるが、いずれにしてもその原図の作成年代が4世紀に遡ることは誤りないものとされる。さらにナポリ周辺の描写が有名なPliniusの死に係わるVesuvio火山の大噴火(79 A.D.)以前の状況——Herclanium, Pompei, Oplontisの存在——を示すことから原図の一部の典拠が1世紀に遡る可能性のあることも主張されている。

次に各々のpersonalificationについて略記する。まずRomaは王座に坐し、冠を戴いて赤い衣をまとった女神?をもって示され、左手に槍、右手に王権と世界を象徴すると思われる球体を持ち、左手近く盾を描いている。この女神は二重の円環に囲まれ、その円内をチベル川が貫流し、またこの円からローマ道路が放射状に描かれその一つを除いてすべての道路に名が記されている。この様子から他の両都に比べ一段と中心性の度合の強い印象を与えている。

Constantinopolisもまた赤い衣をまとして王座に坐った女神として描かれているが、右手は球体を持たず、球体を持った人物像を頂上にのせた記念柱を指し示し、左手は槍と盾をもつ。

Antiochiaもまた右手に槍をもって王座に坐った女神として示され、その傍にオロンテス川の神格化と思われる若者?が、また足下には水道橋のアーチとオロンテス川が描かれている。この女神のすぐ左手に、木立に囲まれた神殿が描かれているが、これは図中に描かれた他の神殿とは異なり、明らかにダフネのアポロ神殿を知る者の手によって描かれたと思われ、この種の図像としては珍しいpersonalificationの例といえる。この神殿は362 A.D.に火災により損害を蒙っているが、その存在は前述の作成年代と矛盾しない。

これら三都市に限って示された女神像については、他に皇帝像・聖職者像などの諸説があるが、ローマ貨幣のモチーフのひとつにRoma女神のあることが注目される。Krautheimer, R.はこの図を5世紀初頭のものと考えRomaの近くに聖ペテロのバシリカの描かれていることからキリスト教に係わる図像と考えているようである¹¹⁾。mappa mundiにはBeatusの黙示録注釈書所載図のように多くの都市にその司教像を描くものもあるが、その可能性は小さいように思われる。

Peutinger図においては最重要都市として示された上記三都に次ぐ重要な都市を示す記号として、複数の塔をもつ多角形の囲郭(市壁)で示された六都市、Aquileia, Ravenna, Tessalonice, Nicomedia, Nicea (Ancyra)がある。これらはいずれも4世紀頃に繁栄していた都市と思われる。この種の都市記号はDilke, O.A.W.が指摘するように古代ローマのagrimensores(土地測量士)の教本のうちに見ることができ、Harvey, P.D.A.はこの種の図像を伴う教本の年代について5世紀中葉を遡らないとしている¹²⁾。しかしDilkeはこの種の教本のうち同類の図像を描くHyginus Gromaticusについて、その用いられたラテン語からして余り後世のものではなく、教本が羊皮紙に記される以前のパピルス原本にこの図像は既に描かれており、パピルスから羊皮紙あるいはヴェラムへの転記は3世紀で

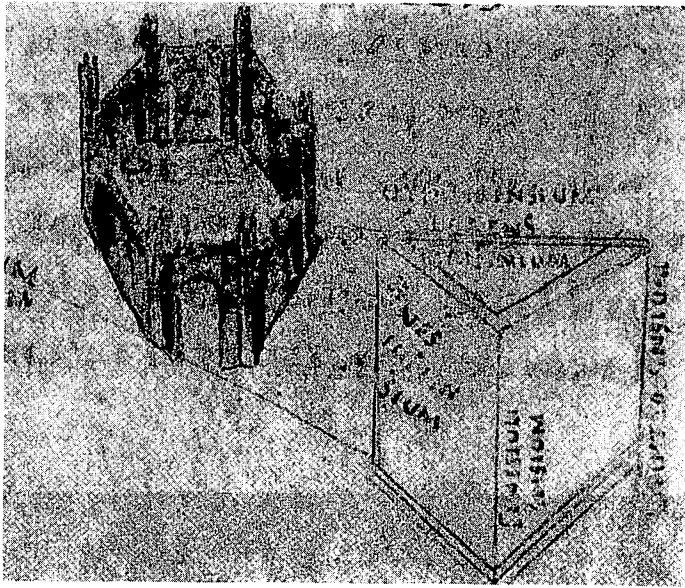


図2 Hygenus Gromaticus

あったとしている¹³⁾。この推測が正しければこの都市記号は古代ローマ起源であるといえる。

要するに Peutinger 図において、集落は重要度の上位の都市から personalification で示された三都、次いで多角形の囲郭で示された六都市、左右二塔並列の都市（ファサードをもつものが上位で、もたないものが下位と考えられる）、道路の屈曲により示される集落の順に類別化あるいは階級区分化されたグループと、湯池場（浴場）、神殿、倉庫、港湾、祭壇など集落の機能を象徴する記号で示されたグループに二分される。しかし personalification で示された三都はその両者を合せた頂点に位置づけられるべきであるといえる。即ちこの三都は大都市であると同時にある種の（政治的・宗教的）権力や支配配（統治）機能を象徴する記号によって図示されているからである。

この二つのグループは personalification を別として、前者は conventional sign、後者は iconic sign により図示した訳で、作図者の都市類別に二つの異なった基準（指標）が用いられているといえよう。誤解を恐れず敢えていえば前者の規準は直線的であるのに対し後者は並列的に意識された結果の類別化であると思われる。

後者のうち湯池場を示す記号にあっては彩色が極めて重要な機能を果している。この記号に付記された地名の多くが Aquis あるいは Aquas 等水を意味する語を有していることからこれらが湯池場を示す記号であることは推測されるが、文字も彩色もなければ単に中庭を有する邸館と見誤まることになる。中庭と見做される部分がこの図で海を彩ったのと同じ水色で彩色されていることからこれらが水に関する記号であることが分る。即ちここでは彩色が記号表現として極めて重要で Peirce, Ch. S. のいう記号の一次性 firstness

に相当するものと考えられる。

Ⅲ. Mappa Mundi と都市記号

次に中世キリスト教世界における mappa mundi（世界地図）上の都市記号について略述する。

mappa mundi における都市の記号的表現は余り多くない。多くの場合文字で都市名を記すばかりである（中世イスラーム地図では地名とともに小円を描くもの多いのと対照的である）。記号的表現としては ① 塔を伴った囲郭、② 塔を伴った城門（市門）、③ ②以外のある種の建造物などが最も多く、都市にとって塔を伴った囲郭や城門が極めて重要な

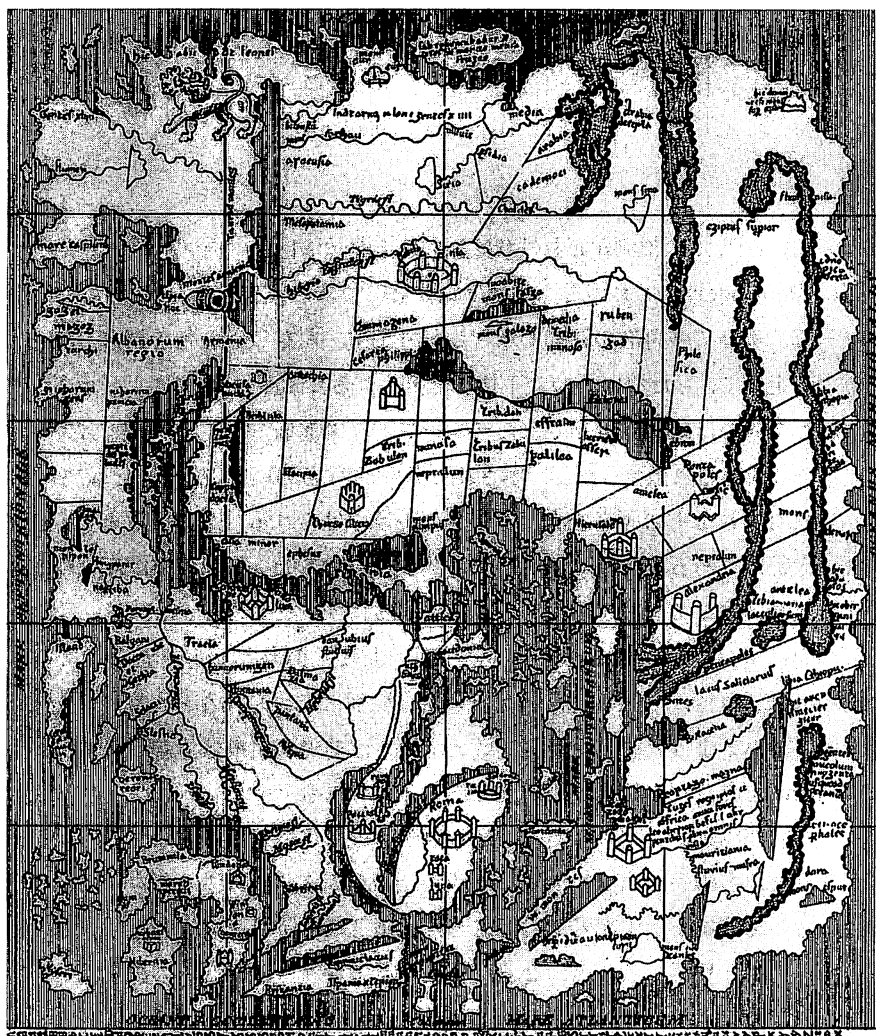


図3 Anglo-Saxon 図（抄写）

景観要素であることを反映している。

例えば大英図書館所蔵の方形の *mappa mundi*, Anglo-Saxon (Cotton) 図 (10—11世紀) においては都市は多くは①で示されているが、塔の数によりランクがあり、少ない場合2個、多い場合6個の塔を描いている。塔の数によって囲郭の囲む図形が異なってくるのは当然である(塔は通常囲郭の角に示されているため)。これによって作図者の意識した都市のランク付けを知ることができるが、最も多くの塔(6塔)を描いた都市が Roma と Babylonia (Babylon) であることは興味深い。Babylon はある意味において旧約的世界の中心であるのに対し、Roma は中世キリスト教世界の中心としてこの表記は当然の結果であるといえよう。なおこの図は Peutinger 図と同じ都市記号を用いている点注目すべきであるがその理由は明らかでない。

次にパリの Ste. Geneviève 図書館所蔵の St. Denis 図 (14世紀) を見るといずれの都市も塔をもった城門(塔が囲郭内の建物の場合もある)で示されており、城門や塔の表現にそれぞれ違いがあるがその違いがどのような意味をもつかについては不明である。しかし一見して重要な意味をもつものとは思われない。

この図においては塔の形に尖塔状、ドーム状、城塞状の別があり、最後者は囲郭に付随するものが多いが、他の二つの相違の意味は不明で、尖塔かドームか判定することが困難な場合も多い。この両者の頂上には多くは小円が、またエルサレムの二つの城門の上に示された尖塔上には十字架が描かれている。その他都市名を示していない北アフリカでは唯一の都市の城門の塔上に旗を描く以外は尖塔と小円を描いている。この図の場合、都市を示す記号は図の中心に位置するエルサレムが心持大きく描かれている他は、ほぼ同じ大きさで描かれて、Peutinger 図のようなランク付けはされていないし、都市名の表記に関しても違いは見られない。この図形は基本的には T—O 図式(アジアとアフリカの間にオケアヌスから紅海が湾入していることからその変型あるいは oecumenical map との中間型)に描かれていることからエルサレムを中心に置くことは当然であるが、殊更、パリを描いているのはこの図が「St. Denis 年代記」所収であることから当然といえる(St. Denis はパリ初代司教)、北アフリカの無名市は *mappa mundi* に多く描かれるカルタゴであると思われる。いうまでもなくより厳密な検討はテキストとの照会を必要とするがいまはその機会がない。

各々の都市の記号により個性的な特徴をもたせて描いているのがライプツィヒ大学図書館所蔵の T—O 図である Leipzig 図 (11世紀) である。都市を記号で示す場合、どの都市を示すものを明らかにするには都市名を付記することで十分である。また都市の階級区分、類型区分を表わすにはそれぞれの階級や類型に応じた記号を工夫すればよい。しかし Leipzig 図においてはひとつひとつの都市が固有の図像で示されている。つまり相互不換の関係をもった personalification の図像である(特に Babylonia, Jerusalem, Troia において)。これらのうち注目すべきは Roma の記号が Limbourg 兄弟の Les très riches

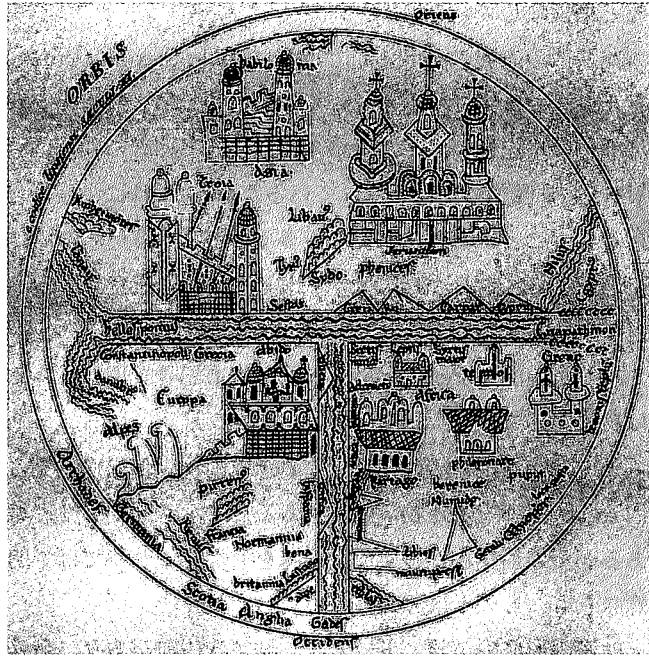


図4 Leipzig 図 (抄写)

heures du Duc de Berry (1413–16) 所収の円形ローマ図の囲郭の中央に描かれた Capitolium と共通する特徴を示していることである。特に両者とも階段状の図像を描いているが、これは6世紀に建設された S. Maria d'Aracoeli の階段を描くものであろうか。ただし同様な描写は Troia や Babylonia にも見られ、前者の場合上部に槍が突出し下に煙や落石らしく小円が描かれ、これがトロイ戦争を描いたとすれば階段状の図形は城壁を描いたと思われる。また Babylonia の場合、この図形のすぐ下に流水らしき描写のあることからこれがユーフラテス川を示すものであれば矢張り城壁か橋を表わすものと考えられる。Roma の図像のひとつの塔上に十字架を示していることからこれがキリスト教関係の建造物であることは確かであるとしても特定の建造物を示すものかどうかについてはなお問題が残る。

Leipzig 図にあっては総ての都市の図像が異なっているとしても、全部が personalification といえるかどうかは疑問である。personalification (特性化) と単なる individualization (個別化) とは区別すべきであろう。この両者の区別を明言することは難しいが、前者は iconic sign としての性格を有しているのに対し、後者は conventional sign としての機能をもつものといえる。即ち、前者は特定の都市を図像であるのに対し、後者は単に都市一般を示すだけの図像である。mappa mundi の場合、時空的にも心性においても現在の読図者は作図者と大きく離れており、両者の図像を区別することは極めて難しいといわざるを得ない。

mappa mundi において personalification によって示される都市は可成り限られている。

聖俗両界において最も重要な都市であった Roma も常に personalification で描かれた訳ではない。Le pianta di Roma a cura di Amato Pietro Frutaz, I, Roma, 1962によると Roma は次のような16種の図像で示されている。

(*は Roma の銘記あり)。

- 1) 王座に坐した貴婦人像 (a *・b・c *の別があるが省略)
- 2) 十字架を有する二つの塔の間の市門*
- 3) 塔のある市壁の平面図の輪郭 (a *・b *・c *の別あるが省略)
- 4) a 鐘楼と塔を有するバシリカ式大建造物のファサード*
b 鐘楼をもつ小さな教会*
- 5) ポルチコ (柱廊玄関) を有する塔*
- 6) 胸壁を有する壁*
- 7) チベル川に沿った門*
- 8) 連続した三つの塔*
- 9) 川に沿った壁に囲まれた、塔のある大きな城塞 (カステッロ)*
- 10) 二つの塔をもった市門*
- 11) 塔のある囲郭で、前方が開かれ、そこから川が海へ流出している*
- 12) 胸壁を有する円形闘技場 (コロッセオ)*
- 13) 胸壁を有する高い市壁と円形闘技場*
- 14) a 二つの高い鐘楼と二つの塔で傍を支えられた教会*
b 二つの鐘楼で傍を支えられたバシリカ*
- 15) a 胸壁を有する高い壁と開け放たれた扉の門を有する市
b a と同様で若干の違いがある
- 16) 胸壁を有する高い壁と塔のある門を有する市で内部には帝国の鷲印 (Aquila imperiale) を示す。また内部に、側面に二つの塔を有する大聖堂、記念柱 (colonna istrata), オベリスクを示す。

以上の多くの場合、Roma という地名を付記していることからいって、他都市を示すのに用いても一向に差し障りのないものが多い。16) は Roma と銘記しなくても明らかであろう。なお12) 13) の円形闘技場はローマだけにある訳でないからこの図像をもって直ちにローマであると解することは難しい。以上を大別すると次のようになる。

- ① 王座に坐す貴婦人像で示すもの
- ② 都市的建造物 (多くは塔、鐘楼などを有する) で示す
 - i 市門または市壁で示す
 - ii その他の建造物で示す
- イ バシリカまたは教会
- ロ コロッセオ

iii i と ii の両者を示す

市壁とこれに伴う塔はローマ都市の象徴であり、これが都市記号として用いられることは極めて自然である。

IV. 初期ローマ図若干

都市図あるいは都市地図を描く場合、その図形の決定は Uspenskij, B. A. のいう幾何学的統辞法によるものと意味論的統辞法によるものがある¹⁴⁾。幾何学的統辞法による最たる例は描く画面の形や材質に規制された場合である。いずれの場合も現実の都市の形状に捕われることなく描かれることが多い。しかし実際に描かれた図形は現実の都市の形態と両統辞法の三つの観点から作図あるいは読図されるものである。

都市を方形や円形で表わすことの多いのは、画面の形により良く合致するということがあろうが、理念的な都市の形状による場合が多い。都市はマクロコスモスの形状に従って建設されることを理想としたし、現に存在する都市それ自体もコスモスとして捉えられた。

古代ローマの建築家 Vitruvius が理想都市の囲郭として円形を考え、その内部を天空の諸方向に合せて街路を通す (De architectura I, 5・6) のも単に円が最短の距離で最大の面積を囲むとか、死角が少ないとか、中心からどの方向へも最短距離で周辺に達し得るとかといった効用からだけではない。

mappa mundi で、完全な円形として描かれることの最も多い都市は T・O 図の中心を占めるエルサレムである。既に Madaba のモザイク図のエルサレム (6 世紀中葉) がこの町を楕円状に描いているが、これは円形の町を斜め上から俯瞰した姿である。また方形に描かれたエルサレムもある。一般にその図像が三角タイヤグラムの象徴点に近いものほど、整形化されて描かれるといえる。円形に描かれたエルサレムの内部が多く十字状あるいは T 字状に区分されているのも、世界を T-O に区分した観念によるものであることは容易に予想できよう。

古代ローマにあっても Roma Quadrata が単に方形のローマを意味するばかりでなく、「直角をなす」(squared) あるいは「四分割」(quadripartite) のローマを意味し、囲郭内を東西に走る街路 (decumanus) と南北に走る街路 (cardo) が町の中心で直角に交差し、宇宙の中心に位置する不動の存在であることを象徴するものである¹⁵⁾。南北の街路が軸を意図する cardo という言葉で呼ばれていることは極めて象徴的である (軸は天空の中心で不動の北極に通ずる)¹⁶⁾。

西洋においては多くは都市を円形に描くのに対して、中国においては古来方形に描くことが多かった。これはヨーロッパの囲郭都市に円形が、中国のそれに方形が多かったことと対応しているのも事実であるが、いずれの場合も実際には幾何学的に完全な円形や方形でない場合が多いにもかかわらず整形化されて描かれているのが普通である。この両者の違いは根源的には世界観の違いに由来しているものと思われる。mappa mundi が多く



図5 Paolino 図

大地を円形に描いているのに対し、中国では天円地方の観念があり、これが都市の理想の形態を方形としたもの考えられる。このことは周礼考工記の「匠人営国，方九里，旁三門，國中九經九緯，經涂九軌，左祖右社，面朝後市，市朝一夫」に端的に示されている。勿論この整形化には方形の紙面を有効に使用するという上述の幾何学的統辭法にもかかわる問題である。

特殊な事例として都市の形態を特定の動植物や事物の形で表現する場合がある。これは

いうまでもなく極めて象徴的な表現で、例えばローマの場合、都市全体をライオンの形をした囲郭で囲むミニアチュール（13世紀）や七つの丘で示すミニアチュール Roma Civitas Septicollis（14世紀）等がある。後者は囲郭を象徴すると思われる城塞のうちに七つの丘を描き、城塞からチベル川が流出している。いうまでもなく両者とも意味論的統辞法により描かれたものである。

ローマの都市地図について見ると、16世紀以降多く描かれた精密な鳥瞰図式の地図は別として、初期の比較的小さなものは全体を楕円または円形やそれに近い形に描いた例が多い。1500年以降でも Mario Fabio Calvo の描いた“Roma Quadrata”（1526）は文字通り方形（実は斜め上からの視点から描いた菱形）や八角形の例もあるが、例外的で、彼には Miliarium Aureum を中心に16の市門をもつ円形の囲郭を示すローマ図を描いているが、これらは地図というより古代ローマを現わした象徴的図形である。

初期のローマ地図は普通モニュメンタルな建造物いわゆるランドマークを絵画的に描く

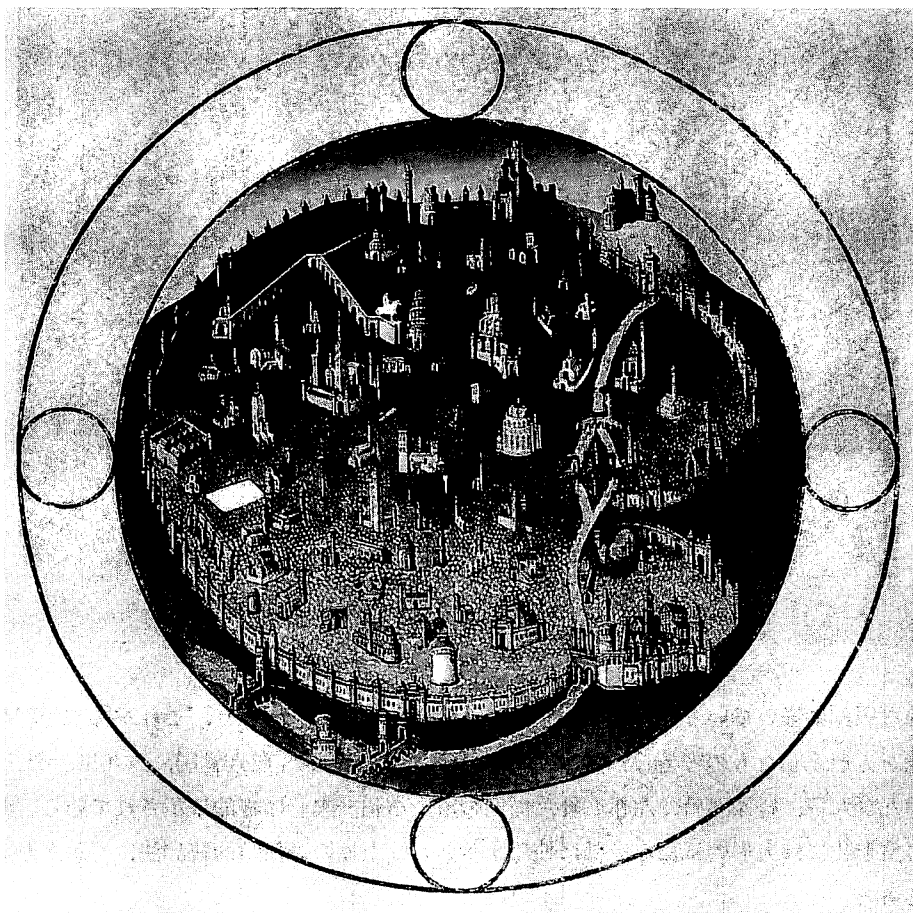


図6 Limbourg 図

だけで、街路を描くものは殆どない。しかし現存する最古のローマ地図ともいえるべき Fra Paolino da Venezia の “Magna Chronologia” 所載のローマ地図 (ca 1320—30, 景観年代は13世紀末頃) は楕円形の囲郭の内部に街路を描いている。囲郭に示された市門の重要なものには名前が記されているが、これらの街路のすべてを特定することは困難で、Harvey, P. D. A. はこの図を spirited representation であって far from realistic としている。しかし、囲郭の内部を貫流するチベル川や七つの丘、水道橋、コロセウム、サンタンジェロ城等比較的正しい位置に識別することができる。

15世紀前半には幾つかの有名な円形のローマ図が描かれているが、それらのうち最も有名な図は Limbourg 兄弟による “Les très riches heures du Duc de Berry” (1413—16) 所収のローマ図である。この図は円形の画面にほぼ円形に囲郭を描いているが、その内部には街路を全く描かず、主要な建造物を比較的正しい位置関係で示している。

これと同様な図としては他に Taddeo di Bartolo による Palazzo Pubblico のフレスコ

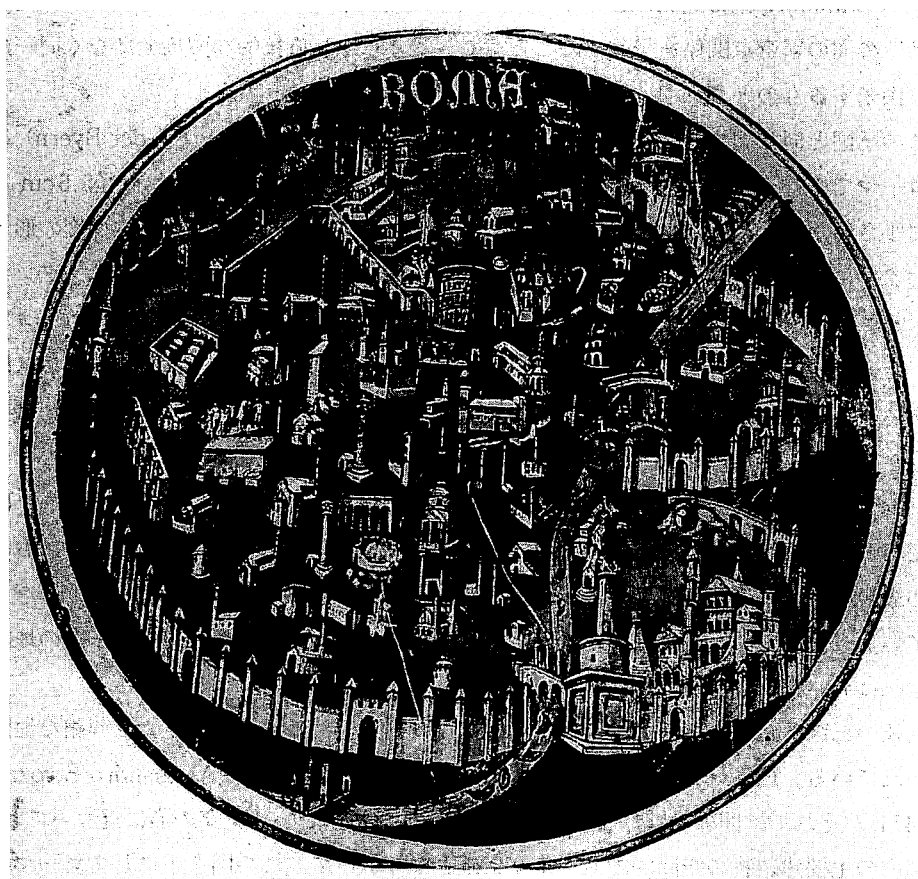


図7 Taddeo 図

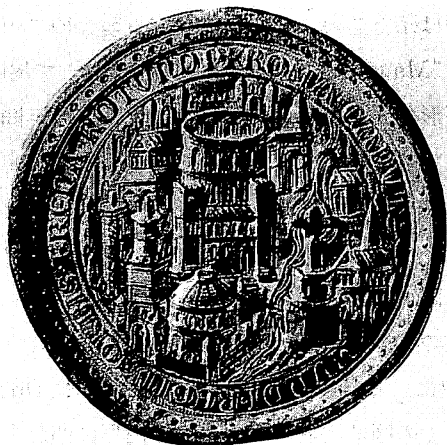


図8 Ludwig のシール

画 (1413—14) や Orosius Master とその工房による図 (ca. 1418) がある。これらの図に比べ Limbourg 図は建物間のスペースが広く描かれているが、これら三図間の図柄の類似はその間の緊密な関係を予想することができる。しかし直接的な関係ではなく同一の原図に由来するものとされている。

この三図と同じ図柄を、よりコンパクトな形で示したのが Ludwig IV (dcr Byern) 皇帝のローマでの戴冠式を記念して作成された黄金のシール (1328) である。直径5.5cm と余りに小さいため極めて限られた少数のモニュメントを、一見して識別できる程度の形でコンパクトに示している。即ち聖ピエトロとオベリスク、バシリカ (S. Maria), サンタンジェロ、パンテオン、ネロとアントニナの記念柱、元老院、コロセオ、チトゥスまたはコンスタンチヌスの凱旋門等である¹⁷⁾。またこれらの建造物の配置と上記の三図と基本的には同様である。このうち S. Maria のファッサードが上述の Roma Civitas Septicollis の城塞と類似していることは興味深い。

Meiss, M. によると Paolino 図が建物のファッサードや丘陵を二次元的 (平面的) に描いている (サンタンジェロは例外と考えるが) のに対しルドウィッヒのシールにおけるその表現は Cavallini, Giotto, Duccio に始まる絵画的描写における意味深い変革を反映している。即ちこのシールでの三次元的 (立体的) 描写は14世紀から15世紀早々の地図を風景画において採られた原理に基礎を置くものとする¹⁸⁾。

前述の三図は建物の名を示していないが、15世紀後半にはそれを示すより詳細な地図が描かれている。Pietro del Massaio 図 (1469, 1472, 1490 s) や Alessandro Strozzi 図 (1474) がそれで、囲郭の整形化の程度は前三図に比べ小さく、実際の形に近づいており、囲郭内の主要建造物の空間的配置もより正確となっていて、この図を手にしてローマを探訪することも可能でありガイドマップとしての役割を十分果し得たと思われる。

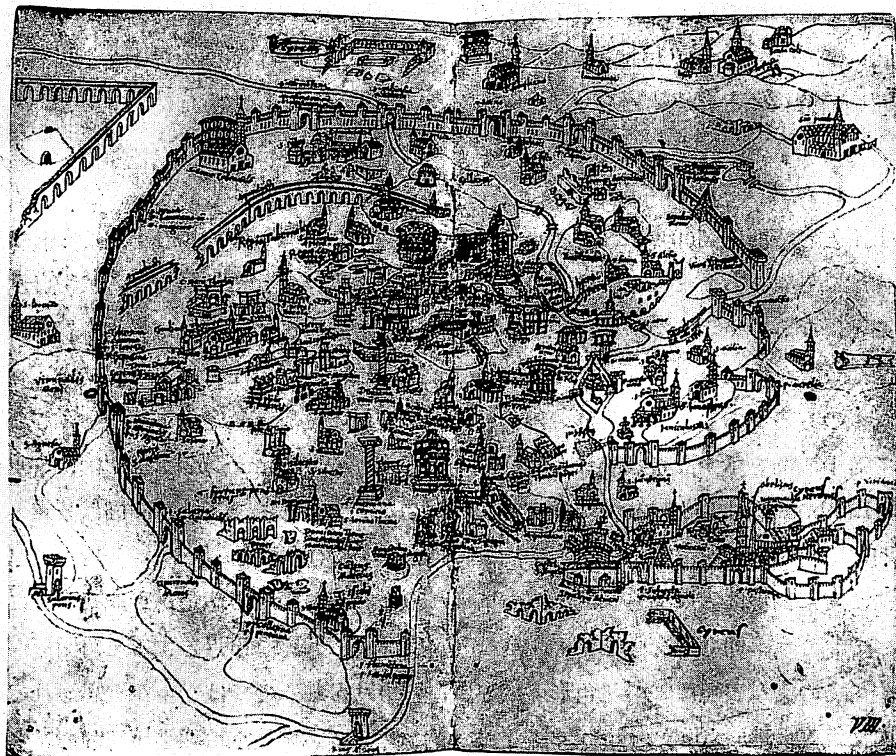


図9 Strozzi 図

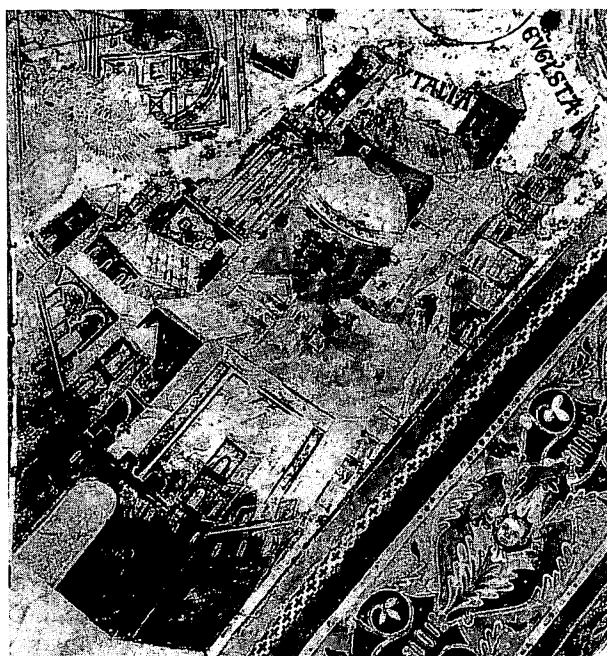


図10 Cimabue 図

逆にこの種の図で最もコンパクトなものはアッシジの聖フランチェスコ教会に見られる Cimabue のフレスコ画 (13世紀末) があるが、対景図に近いより低い視点から描かれており、囲郭の背後に主要建造物を層状に重ねて奥行を表現している。

む す び

以上主として西暦1500年以前の都市の図的表現についてローマの場合を中心として若干の予備的な考察をおこなった。より綿密な都市図史あるいは都市地図史的な検討は別稿に譲ることになる。筆者のかつての主張の通り都市ローマの図的表現はいずれも絵画 (P) と地図 (M) と象徴 (S) を頂点とする三角図表の内に位置することは明らかであろう。元来概念上のものであるこの三角形の内部に各々の図像の位置を確定することは難しいが、強いて若干の例を示すならば personalification の諸図や Roma Quadrata 図は S 点の近くに、Limbourg 図で代表される類の図は S 点と M 点の間に、Cimabue 図は S 点と P 点の間に、Strozzi 図は M 点と P 点の間に位置するものと考えられる。

最後に文章表現においても図的表現と同様この種の三角図表の想定が可能なことについて述べておこう。即ち理念 (I) と現実 (R) と虚構 (F) を頂点とする三角図形がそれで、すべての文章表現はこの三角形の内部に位置づけられるのではないかと思われる。今日、人文主義地理学 (humanistic geography) として文学作品を地理学研究の題材とすることもしばしば見られるが、古地図研究者は読図という作業を通じて既に同様な主旨の研究をおこなってきた訳である。

ただ Roma Quadrata のような古代ローマを回顧的に描く図の場合は、作図者と同時代のローマを描く同時代地図と異なり、理念としての古代都市ローマを描いているように、文学作品においても作者は必ずしも現在の時空に立脚して叙述するとは限らない。

Roma Quadrata の三角図表での位置づけを平面的・二次元的な三角形の内に示すよりも S 点近くの平面下に位置するものと考えられる。従ってこれらの三角図表もまた立体的・三次元的な三角形 (即ち逆三角柱あるいは三角錐) をなすものとして再考すべきであろう。16世紀以前のバリを描く図において考古学的調査に基づく科学的地図を除く殆どすべての図が、ある種の理念や虚構によるものであることから、つまり plan scientifique というよりも plan fictif あるいは plan idéal であることからしても三角図表の立体化を考察すべきものとするが、いまは問題提起のみとしたい。

注

- 1) 王庸, 中国地理学史, 商務印書館, 1938, pp. 38-42.
- 2) Harvey, P. D. A., The History of Topographical Maps, Symbols, Pictures and Surveys, Thames and Hudson, London, 1980.
- 3) 拙稿, 都市図—シンボルと絵画の間に—, 地図情報, Vol. 2 No. 4, 1982.
- 4) 内田種臣 (編訳), パース著作集 2 「記号学」 勁草書房, 1986.

- 5) Keates, J. S., *Understanding Maps*, Longman House, Harlow, 1982, Chap. 7.
- 6) 拙稿, カルトロジーの方法論に関する覚書, 人文地理学の視圈, 大明堂, 1986.
- 7) 拙稿, 地図にみるバリの景観変遷—特に17世紀のバロック化について—, 地理(古今書院), 27-11, 1982.
- 8) Miller, K. *Die peutingeringische Tafel*, Brockhaus, Stuttgart, 1962 (図の長さは Harvey P. D. A. op. cit. によると6.75cm).
- 9) Dilke, O. A. W., *Greek and Roman Maps*, Thames and Hudson, London, 1985, p. 115. 以下の記号の数はこの書による.
- 10) Dilke, O. A. W., *Itineraries and Geographical Maps in the Early and Late Roman Empires*, J. B. Harley and D. Woodward (eds.), *The History of Cartography Vol. 1. The Univ. of Chicago Press*, 1987.
- 11) Krautheimer, R. *Three Christian Capital, Topography & Politics*, Rome Constantinople Milan, Univ. of California Press, 1983, p. 116.
- 12) Harvey, P. D. A., op. cit., p. 54.
- 13) Dilke, O. A. W., *The Roman Landsurveyors, An Introduction to the Agrimensores*, David & Charles, Newton Abbot, 1971, p. 132.
- 14) ウスペンスキー, B. (北岡誠司訳), *イコンの記号学 中世の絵を読むために*, 新時代社, 1983(原著は1971).
- 15) Rykwert, J., *The Idea of a Town, The Anthropology of Urban Form in Rome, Italy and the Ancient World*, The MIT Press, 1988, p. 99 (前川道郎・小野育雄訳, <まち>のアイデア, ローマと古代世界と都市の形の人間学, みすず書房, 1991).
- 16) Dilke, O. A. W., op. cit. (1971), p. 231.
- 17) Harvey, P. D. A., op. cit., p. 74.
- 18) Meiss, M., *French Painting in the Time of Jean de Berry, The Limbourgs and Their Contemporaries*, George Braziller, N. Y., 1974, Text Vol., p. 209 f.

図版の典拠

- Furtaz, A. P., *Le Piantes di Roma*, Istituto di Studi Romani, Roma, Vol. II, 1962, 図1・図7・図8・図9・図10.
- Dilke, O. A. W., *The Roman Land Surveyors, An Introduction to the Agrimensores*, David & Charles, Newton Abbot, 1971, 図2.
- Lelewel, J., *Géographie du moyen âge, Atlas*, Meridian Publishing, Amsterdam, 1967, 図3・図4.
- Harvey, P. D. A., *The History of Topographical Maps, Symbols, Pictures and Survey*, Thames and Hudson, London, 1980, 図5
- Samaran, Ch., Longnon, J. & Cazelles, R., *Les très riches heures du Duc de Berry*, Musée Condé, Chantilly, 1969, 図6.

Picture Map, Surveying Map and Signs of a Town in Mappa Mundi and Early Roman Plans

Tadashi TAKAHASHI

Department of Socio-Information

Faculty of Informatics

Okayama University of Science

Ridai-cho 1-1, Okayama, 700-0005 Japan

(Received October 5, 1998)

An attempt of this note is to make clear the nature of maps. Between a landscape painting and a surveying map, there are so many kinds of graphic representation that it is too difficult to classify these graphic representations. The author intended to place maps in position on the trilinear chart with three apexes, namely P (Picture), M (Surveying Map) and S (Symbol). For example, the personalification of Rome in the Peutinger Table is situated near an apex S, the Limbourgs' Plan is between S and M and the Strozzi Map is between P and M.